

# 唐詩読解上の誤差

——訓読批判(其の二)——

松 尾 善 弘

(一九八〇年十月一日受理)

## 一 「野曠天低樹」の解釈

唐代四大自然詩人(王・孟・韋・柳)の一人として名高い孟浩、字、浩然(六九一—七四〇)は湖北省襄陽の人。その代表作「春暁」は古今の絶唱と称される。

春眠不覚暁 処処聞啼鳥  
夜来風雨声 花落知多少

五言絶句で、暁・鳥・少が上声二十九篠の韻(暁は押韻しなくともよいところ)。平仄の格律は前半の平起式と後半の仄起式が合わさった拗体である。『全唐詩』では転・結句を「欲知昨夜風 花落無多少(知らんと欲す昨夜の風/花落ちること多少も無し)」とするが、これはやや平板の感を免れない。ものうい春の明方をうたってよく惜春の情を表出するといわれるが、最近出版された『唐詩選』中国科学院文学研究所編

松 尾 善 弘 (研究紀要 第三二卷)

(人民文学出版社)では、「明快な表現であるが、意外に屈折した趣がある」と評している。

全詩語言明白如話、意思却相当曲折。

一海知義氏も「春暁」が決して平凡な内容ではなく、「孟浩然是高級官僚の仲間入りを志して失敗した人であり、いわば、この詩は余儀なくされた浪人生活から生れた居直りの詩なのである」(『漢詩の散歩道』日中出版)と、その時代背景またその生活に即して見直せば、新たな発見があることを示唆している。

春あけほの薄ねむり まくらに通ふ鳥のこゑ  
風まじりなる夜べの雨 花ちりけんか庭も狭に  
(土岐善磨「鶯の卵」)

うっかり寝すぎた春の朝  
小鳥の声で目がさめた  
夜中にきいたあのあらし  
花はどんなに散ったやら

(目加田誠『唐詩三百首』平凡社)

三三五

朱門に対する一種の揶揄の情をみてとるところまではいかないが、いま、手元にある数種の注釈本を繕きながら、特に結句の読み下し文(訓読)について考察してみたい。

春眠 暁を覚えず／処処 啼鳥を聞く／夜来 風雨の声／花落つること知る多少ぞ (右記平凡社本)

花落つること 知んぬ多少ぞ (『唐詩選』目加田誠訳注 集英社)  
花落つること 知んぬ 多少ぞ (『唐詩選』目加田誠 明治書院)

同一注釈者による読み下し方にさえこれだけの「工夫」が凝らされている。調べていくと各本ともさまざまに「苦心」が払われていることに気付く。

花落つること多少なるを知らんや (『唐詩選』高木正一 朝日新聞社)

花落つること知る多少 (『唐詩鑑賞辞典』前野直彬編 東京堂)

花落つるを知る多少ぞ (前記日中出版社本)

花落つること、知る多少 (『中国語で学ぶ漢詩』田中秀 白馬出版)

訓読の枠内で考える限り、これらのよみ方のちがいは、その当否を云々するのはあまり成算的ではあるまい。それぞれの読み方にそれぞれの見解がこめられているだろうから。要はこれらのよみ方はあくまで次善手であって、「知多少」という漢文を訓点を施こす直訳法に訓読のみで理解することは基本的に不可能、少なくとも極めて不十分な理解しかできないことを認識しておればよい。現に殆んど注釈書がこの句について懇切な解説を加えて読者の注意を喚起している。

花落知多少——花はどのくらい落ちたかしら。「多少」は数の多い少ないを尋ねる疑問詞。疑問詞の上に「知」があるときは、その

「知」は「不知」と同じ意味を持ち、「知多少」は「多少を知らず」の意味となる。あるいはこの「知」を「いったい……？」のように

疑問詞を強調する語と見てもよい。(東京堂本)  
高木正一氏は次のように説明する。

李頎の詩に「憶君淚落東流水 歲歲花開知為誰——君を憶うて涙は落つ東流の水／歳歳花開くも誰が為なるを知らんや」また杜甫の詩に、「明年此会知誰健——明年の会い誰か健かなるを知らんや(九日藍田崔氏莊)」などとうたうのがそれであり、「いったい——かしら」という気持をあらわす。多少はどれほどという意の疑問詞。

してみると、この句の原意により近い読み方は、「花落つること多少を知らず」ということになるうか。それが無理ならば、ここはせめて「花落つること多少なるを知らんや」がより原詩に沿ったよみ方ということになるう。

『唐詩三百首』邱燮友註訳(三民書局)や廣智書局出版『唐詩三百首』では、いずれも「花はどれくらい落ちたかしら」と現代語訳している。

昨夜経一夜的風雨吹打、不知道花兒又落了多少?

想起昨天夜裏風雨中、不知道落下了多少的花兒呢?

前記の人民出版社本は、「疑問詞を使って、花はすでにたくさん散ったであろうが、またそれが少なくあってほしいという複雑な心情を表出している」という。

後兩句回憶夜来的風雨、為花木擔憂。用問句写出想像花已經落得太多、又希望它落得不多、的複雜心情。

さて、本来「多少」には次のような字義がある。

- ① 多いと少ない。多寡。(多さという量の意味)
- ② どれくらい。いかほど。(いわゆる疑問詞)
- ③ たくさん。多い。(少は助字として)
- ④ いくらか。若干。(少しの意味で)

「知多少」の「多少」を②項で説明しなければならぬことはいままで見てきた通りである。

最後の句の「知多少」は、多少なるを知らんや、従って実は「不知多少」、多少なるを知らず、の意である。ある解釈には多少とは多きことといい、たくさん散りしいたであろうと説いているが、そうではない。(『新唐詩選』吉川・三好共著、岩波新書)

故に『大漢和辞典』などが③項で「春曉」をあげて説明するのはやや妥当性を欠いているといわねばならない。

以上、疑問詞を用いた「知多少」のような中国文はそもそも本質的に日本語の訓読にはなじまないことを、身近な例で指摘した。次には同じく孟浩然の詩を材料にして、訓読が不十分な意味伝達の役割しか果さないことを再認識し、またその訓読のちがいが解釈上どのような誤差を惹き起すかみていこうと思う。

宿 Sù  
建 Jiàn  
德 Dé  
江 Jiāng  
孟 Mèng  
浩 Hào  
然 rán

移 yí  
舟 zhōu  
泊 bó  
烟 yān  
渚 zhǔ

日 rì  
暮 mù  
客 kè  
愁 chóu  
新 xīn

野 yě  
曠 kuàng  
天 tiān  
低 dī  
樹 shù

江 jiāng  
清 qīng  
月 yuè  
近 jìn  
人 rén

松尾善弘 (研究紀要 第三二卷)

新・人が平声十一真の韻。平起式で起句の四字目烟 (一本で幽に作る) が平声で二四不同の格律を外した単拗。「建徳江」は錢塘江、浙江省の衢県より建徳県にいたる間の別名新安江という。夕方には霧のかった中洲のあたりに舟泊りして、夜景描写のうちに旅愁をこめる。起句は「写地」、承句は「写時」、転・結句が見事な対句となっている。

建徳江に宿る

舟を移して烟渚に泊す

日暮 客愁新たなり

野は曠くして 天 樹に低れ

江は清くして 月 人に近し

(『唐詩三百首』目加田誠訳注 平凡社)

建徳江に宿泊して

舟を動かして霧のこめた渚に泊まれば

日暮れどき旅愁はあらたに湧きおこる

野はひろく 地平線のはてでは空が木々に垂れさがるよう

川水は清く 月かげが私に近づいて来る

(『唐代詩集』前野直彬編訳 平凡社)

転句の「天低樹」に注目しつつ各本を調べてみると、たいてい「天樹に低れ」とよみ、「空は樹々の上に垂れる」と訳している。『漢詩入門』入谷仙介(日中出版)は、「天は樹に低く」とよんでいるが、訳の方は「広々とした原野、天は樹のこずえ近くまでおおいかぶさり、川は澄みわたって、月は人の頭のそばにかかっています」となっていて他書と同じような通釈になっている。(傍点は筆者)

ところが中国で出版された注釈本では、この部分は、「野はひろびろとしていて、そのため天は樹より低く、江は清らかで、そこで月は人に近づいてみえる」と口語訳してある。

野曠所以天低於樹、江清所以月能近人。

(『唐詩三百首詳折』 喻守真編注 中華書局)

遙遠前面、空曠的田野、暗淡的天空比樹還低、江水清盈、月影落在水上、彷彿更靠近人了。

(『唐詩三百首』 邱燮友注 三民書局)

這兩句說、原野極為廣闊、放眼看去、似乎遠處的 sky 反低於樹木。江水澄清、月映水中、好象和人更接近了一些。

(『唐詩選』 人民文學出版)

つまり「天低樹」の「低」を日本語訓読では「天が樹に低れる」、低垂という動詞として捉えるが、中国語の感覚では「天低於樹」、即ち

「天は樹より低い」という形容詞(比較を表わす)として捉えているのである。この「低」は、「霜葉紅於二月花」や「青於藍」の「紅(於)」「青(於)」と同じように、「低(於)」「(より)低い」という語とみなすべきなのである。『唐詩三百首』 廣智書局本ではよりはっきり「天はまるで樹木より低いかのよう」と「比」の語を加えた言い方をしている。

在這空曠的田野裏、遠望天色、好象比樹木還低些、江裏的水、很是清澈、天上的月光映到水裏來、我們從水面上看起來、覺得這月光和人很近的。

そのことは結句の「月近人」の「近(形容詞→遠)」と対照してみても分るのである。

ではこの両者のよみ方の差異は解釈上にどのような影響を及ぼすだろうか。先ず喻守真氏は「もし曠・清の二字がなかったら、低・近の二字はその所を得なくなる」といって、曠——低・清——近の深い関連性を指摘する。そうして「舟中にいるのでなければこういう世界はわかりようがない。もし岸辺にいるものとすれば、低近の二字はびったりしなくなる。いかに用字を適切にしなければならぬかわかるうというものだ」

と感想を述べている。

儻無「曠清」二字、則「低近」二字即無着落、是謂「詩眼」。並且這種境界、非在船中不易領略。換在岸上、「低近」二字、就不見貼、可見用字要有分寸。

邱燮友氏も「三四句は対句となっており、船泊りの夜みた景色によつていよいよ旅路遙かなる思いがした。しかし月かげは人に近く、ますます親しみがわいてくるのだ」といって、夜景の描写を通じて旅愁をうきだたせる作詩効果をよみとっている。

三四句対仗、写夜泊所見の景色、愈覺旅途遼闊蒼茫、然月影近人、倍增親切之感。「曠」「清」兩字是詩眼。

そして、喻・邱氏とも「曠・清の二字が詩眼である」と指摘する。

いま転句を「野は曠く 天 樹に低る」と読めば、訳の方も必然的に、「野は広々として空が木に垂れさがっている」ということになる。だがこの訳によって我々の頭の中にえがかれるイメージは、何の変哲もなただだだっ広いだけの野原の景色ではないだろうか。作者の位置(視点)も、舟中に居るとしようが岸辺に立っているとしようが構わない。

野の曠さと天の低さの因果関係も無視され、ごく平凡な夜景描写の句に終ってしまうのである。ところが、「天 樹よりも低し」と読めば、常識に反して何故そうなのかと疑問に思う気持ちが湧きあがり、そこで曠

——低の関連が生きてきて、「野があまりにも広いから、舟中からみる天(中国語の天は地面から上の空間を指す)が、ふだんは高い空とみるの

に、あたかも周囲の木々より低い感じがする」のである。錯覚といひ換えてもよい。あるいは実際に岸辺の樹木より天が低いとみることもできる。そして「川(水)があまりにも清澄なので、ふだんは遠い存在のお月さままでも、いまは手の届くほど身近なものに見える」のである。作者はそのような心境にあり、そのように周囲の自然・状況を感得

しているのである。小舟の中でしんみりと旅愁に浸っている作者の姿が、またその情感が如実に伝わってくるではないか。廣智書局本が、「読めば読むほど味わいが出る」といい、邱氏も「理屈をいう詩だが景色描写の妨げにはなっていない」と述べる所以である。

読之耐人尋味。

詩中有説理的詩、而無礙於写景。

「低る」と読むか「低い」と読むかのちがいが、結果的にこれだけの鑑賞の深みの差をもたらす。そう考えれば、両者を単なる読み方のちがいとして処理してしまうわけにはいかないであろう。

調べてみると他の詩においても「低」はおおむね「低る」と読まれてくる。

落月低軒窺燭盡 飛花入戸笑牀空 (李白「春怨」)

落月軒に低れ 燭の尽くるを窺ひ／飛花戸に入り牀の空しきを笑ふ

(「李太白詩歌全解」大野實之助 早大出版)

低空有断雲 近淚無乾土 (杜甫「別房太尉墓」)

空に低れて断雲あり／涙近く乾土なし (『統国訳漢文大成』本)

「低」に「垂」の義があることはいうまでもないが、それはあくまで引申義であって(引申為垂下之義——『辞海』)、本来は「高之反」(『辞海』)、「つまり」「低い、まっすぐで短い」という基本義をもつ「低、底」などと同じ「TER」タイプの語(『漢字の語源研究』藤堂明保)なのである。

『現代漢語詞典』でも「低」字の説明は次のようになっている。

- ① 従下向上距離小(高の反対、地面から近い義)
- ② 在一般標準或平均程度之下(程度の近いこと)
- ③ 等級在下的(ランクが下にあること)
- ④ (頭)向下垂(低頭の場合、||垂)

③の例文として「低人一等」が掲げられている。身分などが人より、一低い、といういい方である。はっきり比較の字を入れれば「我比哥哥低一班」(私は兄さんより一クラス下だ)という文になる。

そこで先ほどの「低軒」に着目すると、「落月 軒に低れ」と読もうが、「落月 軒より低く」と読もうが解釈に差異はないしまたあつてはならないが、空圍を守る女性が軒端に低くかかる月を窓越しに眺めている状況をよりの確に目に浮かばせるいい方はどちらであろうか。この場合、作者の視点は女性のそれと同じである筈だから、作者の眼は部屋の中から夜空に低くかかる月を見ている構図になる。月があたかも窓から中を覗きこんでいると意識するのである。「軒に低れ」と読んだ場合、作者の眼は家の外から女性と月の両者を眺めている構図になる。

次の「低空有断雲」の句は、仇兆鰲が「野曠天低(野は曠く天は低い)、故曰低空」と注している通り、文字通りの「低い空」である。「低空」は「低樹」「低天」等と同じく修飾構造とみなすべきである。

## 二 「山花如繡頰」の解釈

詩(酒)仙と尊称される李白(七〇一—七六二)の代表作に、古来多くの人に愛誦されてきた五言古詩「月下独酌四首」がある。その一は次のような内容の詩である。

花々の咲き乱れるもとで一壺の酒を用意し、相親しむべき友もないまま一人でその酒を酌んでいる。盃を挙げて明月を迎え入れ、地上に映る影とともに三人となった。天上に輝く月は酒を飲む楽しみを理解しそうになく、影もわけもなくわが身に随うばかりである。だが自分にはばらくこの月と影を伴って春の楽しみを満喫しようと思ふのだ。自分が歌うと月も天界をさまよい、自分が舞うと影も地上

で乱れ動く。まだ正気の間は月や影は自分とともに飲みを交え、酔っぱらってしまうとおのおのちりちりばらばら。自分は永久に世俗の情をとりさった遊びを結ぼうと、遙か彼方の天の川のあたりで再会する約束をしたことだ。

花間一壺酒 花間 一壺の酒

獨酌無相親 獨酌 相親しむ無し

举杯邀明月 杯を挙げて明月を邀へ

对影成三人 影に対して三人と成る

月既不解飲 月すでに飲を解せず

影徒隨我身 影は徒らに我が身に隨ふ

暫伴月將影 暫く月と影とを伴なひ

行樂須及春 行樂須く春に及ぶべし

我歌月徘徊 我歌へば月徘徊し

我舞影零乱 我舞へば影零乱す

醒時同交歎 醒時には同に交歎し

醉後各分散 醉後には各おの分散す

永結無情遊 永く無情の遊を結ばんと

相期邈雲漢 相期して雲漢邈かなり

月と花と酒を友に、俗塵を去って自然と遊ぶ風流人、李白のありようが目に見えるような作品である。ところで、最後の二句は「月と影とはそもそも人事を解しない。私心私欲の有情の遊はきれいきっぱり忘れて去って、遙かなる天の川のあたりで末永く無情の遊を結ばんと約束したのだ」という意味である。その「相期邈雲漢」は普通「相期して雲漢邈かなり」と訓読されてなかなか聞こえはよいようだが、文法的には誤読している。「邈」(音渺、遙遠)は「雲漢」(銀河、ここでは仙境ないし幽勝静寂の地を喩える)を修飾している構造であって、読まれるように

「雲漢が邈かである」という主述の構造ではない。そもそも「相期して雲漢邈かなり」では、相期すのと雲漢の関連が皆目見当がつかない。こゝは「相期す 邈かなる雲漢に」(高島俊男『李白』)、あるいは「相期す邈たる雲漢に」(大野實之助『李太白詩歌全解』)のように読むべきところである。

この程度のみみ違えはまだご愛嬌で済まされるかも知れない。しかし、文法のとり違えによる訓読のし方や、送り仮名の違いで地形をも動かすという事態になるとそう気楽に構えてはおれなくなる。

江 jiāng	山 shān	月 yuè	船 chuán	夜 Yè
火 huǒ	花 huā	明 míng	下 xià	下 Xià
似 sì	如 rú	征 zhēng	広 guǎng	征 Zhēng
流 liú	綉 xiù	虜 lǚ	陵 líng	虜 Lǚ
螢 yíng	頰 jiá	亭 tíng	去 qù	亭 Tíng
				李 Lǐ
				白 Bó

五言絶句で、亭・螢が下平九青の韻。開元十四年(七二七)李白二十七才の作とされる。一本で綉を繡に、江を紅に作る。「征慮亭」は楊齊賢の注に「丹陽記に曰く、亭はこれ晋の太安中征慮將軍謝安の立つるところ、因りて以て名となす」とあり、王綺の注では「景定の建康志に、征

